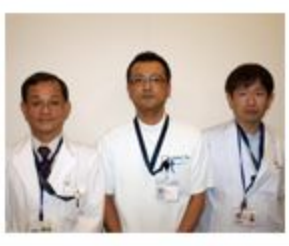
薬剤師情報

- 薬剤師情報トップ
- 会員 在宅医療を始める医療関係者に在宅医療の実際～チーム医療の視点から～
- 会員 薬剤師のための在宅医療「A to Z」在宅医療実践マニュアル～保険薬局編～
- 会員 薬剤師の臨床医学 ジャンル別一問一答
- 会員 患者様と薬剤師のQ＆A
- 会員 処方せんから学ぶ ～処方意図と服薬指導～
- 会員 服薬指導ナビゲーション
- 会員 薬剤師の専門性を高める！資格＆研修の場
- 会員 保険薬局と薬情報に対する患者意識（ニーズ）調査
- 会員 薬剤師に求められる薬学的監視機能～十文字革命～
- 会員 生涯学習の大切さとWebラーニングの有用性
- 医療薬学歴史文庫

「最新の脳卒中治療～医薬品適正使用と医療安全に薬剤師の果たす役割～　病棟薬剤師の評価向上のために今、何ができるか！？」

薬剤師の病棟常駐、チーム医療への参画で「患者のための医療」に貢献

2005年に高知県立中央病院と高知市立市民病院が統合して誕生したのが「高知県・高知市病院企業団立高知医療センター」です。「医療の主人公は患者さん」という基本理念を実現するために、医療局、看護局、薬剤局、医療技術局、栄養局、事務局の各局が並列の関係にある「6局体制」を敷くなど、そのマネジメント体制にも注目が集まっています。そんななかで取り組まれている薬剤局の役割、薬剤師の医療への関わり方をご紹介します。



高知医療センター
薬剤局長　田中 照夫　先生（写真左）
薬剤局科長　田中 聡　先生（写真中央）
薬剤局主任　高平 豊　先生（写真右）

薬剤師の3交代制で「顔の見える薬剤師」を実践

国立大学病院の薬剤部門で十数年間にわたってマネジメントに携わり、「高知医療センター」開院時には創設準備室の薬剤チーム長として薬剤局の創設に関わってきたのが薬剤局長の田中照夫先生です。全国的に初の試みとなった県立病院と市立病院が統合してできた中核病院で田中先生が築いた、薬剤師の取り組みとは一体どんな内容なのでしょうか。

「創設時からの理念でもあった『患者さんが主人公の病院を作ろう』という志を実現するには、職員ひとりひとりが一丸となってチーム医療に取り組むことが必要でした。そして、このチーム医療を実践するにはそういう組織を作るべき、という考えから生まれたのが各職種の専門性を発揮する『6局体制』です。」

すべての局が並列にあり、それぞれの権限と責任が明確化された病院内で、薬剤局においても人の配置や組織のあり方についてさまざまな取り組みがなされてきました。

「人員的なことからお話ししますと、現在当院の薬剤師は正職員が23名、臨時職員が4名の計27名在籍しております。勤務は日勤、準夜勤、深夜勤の3交代制を導入し、救命救急センターにも対応できる24時間体制を整備しました。休日日勤帯も2.5名を配置しますので、入院患者さんのお薬の供給などもスムーズです。通常の病院ですと金曜に土、日、月曜と3日間分の注射薬の準備をしていると思うんです。それを考えたら、常に一日分のセットでいいとなると安全管理上からいってもメリットはかなりあります。」

24時間体制の救急外来や救急搬送される急性期の患者さん、そして緊急手術にもすぐに対応できる体制が敷かれているのはまさに「患者さんのための医療」を実践しているからと言えます。

全病棟に薬剤師を常駐させることが医療の底上げに

また、当院の薬剤局の特徴のひとつともいえるのが「病棟薬剤師」の存在です。

「すべての薬剤師を病棟ごとに割り振り、平日日勤帯には全病棟（7フロア）に最低ひとりの薬剤師を常駐させています。常駐化のメリットは薬剤師が患者さんのベッドサイドに行き、顔と名前を覚えてもらいながら持参薬やアレルギー歴、副作用歴の確認、服薬指導、およびそれらの電子カルテへの登録をスムーズに行えることです。また、当院の使用薬剤はおよそ1500品目ですがそのなかのとくに、麻薬、向精神薬、毒薬などの薬品管理、ハイリスク医薬品の薬歴管理など病棟での管理が徹底して行えるようにもなりました。」

薬剤師にとって最大の責務である「医薬品の安全管理と適正使用」についても、病棟での薬剤業務としてさまざまな取り組みがなされています。

「薬剤師がその専門性を発揮できるのは薬害防止だと私は考えています。薬害を防止するにはまず、患者さんに対して副作用の初期症状をわかりやすく説明すること。そして医師の処方が本当に適正かどうかチェックし疑義照会すること。そして相互作用が問題となるような処方はされていないか、腎機能が低下している患者さんに対して投与量の調整が適正になされているか確認することです。患者さんにあった投与を設計し、処方のあらゆる段階でチェックすることで薬害は防止されます。」

さらに、薬剤師が病棟に常駐することは患者のみならず医師や看護師など病院スタッフにとてもいい影響をおよぼしています。

「薬剤師が病棟に常駐するまでは、医師や看護師からの質問件数は月に40件ほどでした。ところが病棟薬剤師体制を敷いたらなんと、月に400件にも上ったんです。医師も専門領域以外になると分からないこともあります。でも、わざわざそれを薬局まで足を運んで聞くまでの時間もないのが現状です。そこで、当院のように常に医師と薬剤師が顔と顔を合わせていられれば気軽に『これってどうなんだろう？』って聞けるのです。医薬品の適正使用を考えても、薬剤師が病棟に常駐しているということは非常に大きな効果をもたらし、医療の質の向上につながっていると思います。」

もちろん、医薬品の適正使用に貢献していることを認識することで、薬剤師本人にとってのモチベーションもアップします。

「先日、薬剤師向けにアンケートをとったのですが7割以上が『病棟業務にやりがいを感じる』と回答、また9割が病棟に常駐することで『臨床力が身につく』と回答しました。自分の担当診療科の専門性が身につき、得意分野を得られるということは臨床薬剤師としてのレベルアップにもなり将来性にもプラスになるはずです。」

感染症防止やICUなど、チーム医療に積極参加

院内には、感染防止対策チーム（ICT）やICU内など各専門職がそれぞれの知識と経験を活かし、チームの一員として責任をもってその職に当たる場面が多々あります。

「当院のICTでは週に1回カンファレンスを開催し、医師、薬剤師、臨床検査技師が電子カルテを用いて感染防止に努めています。また、ICUではリスクの高い薬を使用するケースが多いため、点滴速度の確認など安全管理の面からバックアップを行います。一般的には、薬剤師といえば薬の調剤がメインだと思っている方もいるかもしれませんが、当院のICUでは薬剤師はベットサイドを巡回し、医薬品が実際に患者さんに適正に投与されるところまで確認し、さらに治療経過も確認していきます。そうすることで薬剤師が専門性を発揮し、『医療の主人公は患者さん』を実践することにつながります。」

緊急を要する脳卒中治療でも薬剤師が関わっています。

「脳卒中治療では緊急を要することがしばしばあります。そのなかでラジカットなどの投与薬を含め、投与方法について医師や看護師らと相談しながら、投与量、スピード、そして腎機能のチェックなどを行います。ここでも医師任せ、看護師任せではなく、医薬品適正使用の確認、服薬指導、副作用管理などの薬学的管理指導において自らが責任をもって管理しています。」

薬剤師および病院、果ては日本の医療の質向上のためにさまざまな取り組みが行われている高知医療センター。薬剤局では今後さらなる向上に向けて新たな提案が行われています。

「私の目標は、2003年に米国視察した際に視察先の大学病院で使用していた『院内医薬品集』の制作です。これは、日本でよく目にする単に添付文書の内容を記載したものではなく、用法、用量の他、薬の選択など、学会のガイドラインに沿った標準的な治療が反映された院内の使用指針になるものです。薬剤師が監視役となり、医療の標準化に則った治療がすべての患者さんになされることが私の目標です。」

おすすめコンテンツ

- ラジカット学術講演会紹介（1）【ラジカットの新しい話題】
- NEW 脳梗塞治療 ～超急性期から慢性期まで～【病態・治療Q＆A】
- 脳梗塞急性期の脳保護療法【病態・治療Q＆A】
- ラジカット8周年記念講演会 ラジカルスカベンジャーは脳梗塞急性期治療に貢献しているのか？【e-Lecture（講演会ダイジェスト）】
- 学術講演 Stroke Total Care【e-Lecture（講演会ダイジェスト）】
- 超高齢者脳梗塞に対する積極的治療介入の有用性の検討～ラジカットの安全性、特に腎機能について～【Stroke Web Seminar】
- 脳梗塞の病態と解剖断面図【ARTERIES of THE BRAIN】
- ノバスタン®HIT全例調査のお願い
- ヘパリン起因性血小板減少症（HIT）【病態・治療Q＆A】

製剤情報

ラジカット
- 製品情報はこちら

サアミオン
- 製品情報はこちら

ノバスタン
- 製品情報はこちら

グルトパ
- 製品情報はこちら

お役立ちリンク

- NO!梗塞.net

最新の脳卒中治療～医薬品適正使用と医療安全に薬剤師の果たす役割～病棟薬剤師の評価向上のために今、何ができるか！？　メニューへ戻る

↑このページのトップへ

サイトマップ | お問い合わせ | 会員登録に関するお問い合わせ | ご利用条件 | アクセシビリティ | プライバシーポリシー

Copyright © 2011 Mitsubishi Tanabe Pharma Corporation. All Rights Reserved.